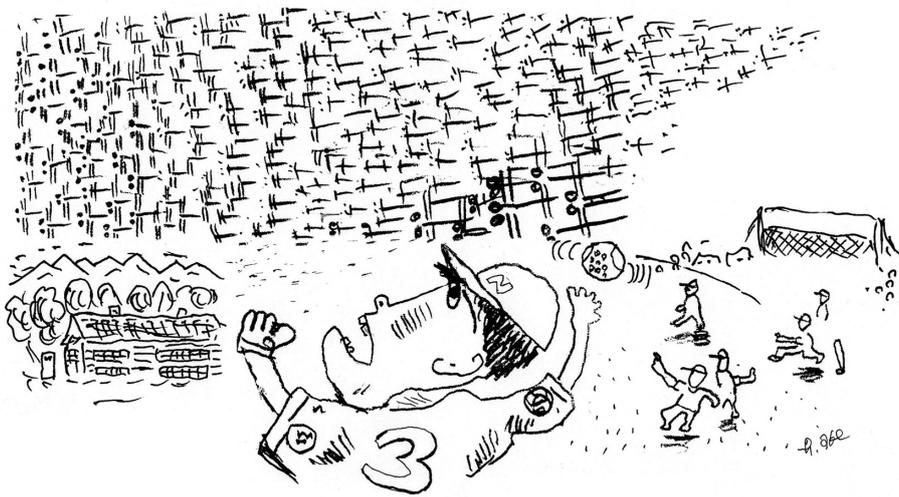


わたしの原風景

5

あべ弘士

あべひろし／絵本作家



小学校の野球部に入れるのは、三年生からだ。さっそく入った。ぼくはだれよりもチビで、だれよりも足がおそかった。でも、野球がすきだった。

そうなのだ。あのころ少年たちのスポーツは野球しかなかった。サッカーはもちろん、卓球もバドミントンもみたこともなかった。プロ野球は長嶋選手が大活躍で、北海道のみんなは全員、巨人ファンだ。少年たちの野球ユニフォームの背番号はみんなあこがれの「3」だ。王選手の「1」より、「3」だった。

ぼくの母さんは、小学校を卒業するとすぐ縫い子になり、結婚してぼくたちが生まれてもずっとミシンがけをしていた。だからぼくの野球のユニフォームも母さんがつくってくれた。

「背番号は、3、だよ、母さん」

ぼくは外野のライトを守らされていた。ボールは、ぜんぜんこない。たまにくるとしたら、ファーストがエラーしてころがってくるときだ。ひまた。横の草むらでキリギリスがなっている。きになる。

女の子がキャーキャー応援している。ファインプレーして、かっこつきたい。でも、ボールはまったくぼくのそばに近づこうともしない。ひまた。

なんだが……ポーツと……ねむたくなって……ウトウト……。とっ、とおくから、声がかきこえてくる……。

「オーイッ、ライト、大きいのがいったぞー」

バック、バックオーイッ」

ぼくは空を見あげた。

「わーっ」

見あげる夕やけの空いっぱい、つなぎトンボがうめつくし、西の山なみにむかって、ゆっくり飛んでいた。ぼくは口をあけたままいつまでも見とれつつつけた。

「オーイッ、ライトオーイッ」